

第 1 次中期目標  
(平成 22 年度～平成 24 年度)  
自己点検・評価書



Niigata University of Pharmacy and Applied Life Sciences

新潟薬科大学

## 第1次中期目標に対する点検・評価書の作成に当たって

本書は、第1次中期目標に対する点検・評価を大学として纏めたものである。

本学では平成21年度までは中期目標を置かず毎年事業計画を立ててそれに従って大学運営を行ってきたが、山崎幹夫前学長の発案により前学長任期最終年となる平成21年末に第1次中期目標が策定され、平成22年度から平成24年度までの3年間はこの目標に向かって大学運営を行うことになった。山崎学長の後を引き継いだ私が学長を務めた3年間は丁度この中期目標期間に当たる。学長在任のこれまで、年度末には当該年度の目標に対して点検・評価し、次年度の事業計画を策定してきたが、この3月で中期目標期間は終了することになることから、この3年間の中期目標に対してPDCA点検・評価を行うこととした。まず、点検・評価に当たるシステム作り着手することから開始し、学長、学部長で構成される運営検討会議の下にPDCAmeetingを立ち上げ検討を重ねた結果、本学にPDCA推進室を新たに設けることとした。同室の主たる業務は学長の命を受けて本学の自己点検・自己評価に係る企画及び調査研究に当たるもので業務の成果等は適宜、運営検討会議に報告するものとされた。

PDCA推進室は鰹坂勝美応用生命科学部教授を室長とし、薬学部の酒巻利行教授、山口利男助教、応用生命科学部の佐藤眞治教授、中村豊教授、事務部の茂木弘邦庶務課長を室員として平成24年9月に設置した。本書はその後のPDCA推進室の地道な作業を母体として各学部関係委員会、各学部教授会の意見を聴取し、運営検討会議で整理し、部局長会の承認を得て、とりまとめた。

第1次中期目標の策定の目的や考え方、中期目標の位置付けなどは既刊の本学大学概要に掲げられており、また18項目からなる具体的な目標も記載されている。本書ではこの18項目それぞれについてそのPlan、Do、Check、Actionを述べており、大きな成果を挙げたもの、反省点が多いもの、などなどが含まれている。我々は、この内容を十分に咀嚼して初めて平成25年度から始まる第2次中期目標の設定を行うことが可能となった。これが本書を作成するために関わった教員、事務職員の多くの努力の最大の賜物である。

なお、第2次中期目標の策定に当たっては、鰹坂PDCA推進室長をチーフとして福原正博薬学部准教授、中村豊応用生命科学部教授のチームで別途作業が進められ、間もなく、学内での検討を終えて日の目を見ることとなっている。本年4月からの平成25年度以降の大学運営は、寺田弘新学長の下でこれによって行われることとなる。第1次、第2次の中期目標に共通する課題は、本学の理念に述べられている目標を達成するために、薬学部、応用生命科学部両学部が協力し、真の意味でのUniversityとして発展していくことにある。

本書の作成のために多大な努力を払っていただいた方々に深く感謝するとともに同時に、中期目標の設定とそれに対するPDCA点検・評価が本学にとって有意義なものになることを願ってやまない。

平成25年3月

新潟薬科大学学長 高木 正道

## 第1次中期目標（平成22年度～平成24年度） 目次

(1) 教育理念	————	1
(2) 教育課程	————	2
(3) 国家試験対策	————	7
(4) FD（ファカルティ・ディベロップメント）	————	8
(5) 教育基盤整備	————	14
(6) 生涯学習・社会貢献・大学間連携	————	15
(7) 研究支援・産官学連携・国際交流	————	19
(8) 地域住民との協調	————	23
(9) ブランドアップ広報	————	25
(10) 学生募集・入学試験	————	28
(11) 学生支援・サービス	————	32
(12) 就職・キャリア支援	————	37
(13) SD（スタッフ・ディベロップメント）	————	41
(14) 組織体制	————	44
(15) ハラスメント防止	————	47
(16) 施設・設備	————	48
(17) 安全管理	————	52
(18) 事業展開	————	56

## (1) 教育理念

### 第1次中期目標 (Plan)

- ① 「大学の理念」・「教育理念」を踏まえた本学の使命について、学内外関係者への周知を図る。
- ② 広報誌や教職員向けの研修会において「大学の理念」・「教育理念」に触れる機会を設けるとともに、学生に対してはオリエンテーションなどを通じてその周知を図る。

### 目標に対する成果・実績 (Do)

「大学の理念」及び教育理念を受けて定めた「教育目標」については、大学HPに公開するとともに、大学案内や学生便覧等の広報媒体にも表記し、それらを必要に応じて在学生へのオリエンテーションや高校生への入試ガイダンス、その他イベント等において配布するとともに、スライド等によるプレゼンテーションを行っている。

また、理念及び2つの学部の特長を生かした教育体制のあり方については、運営検討会議「学則等検討 meeting」において検討中である。

### 成果・実績に対する点検・評価 (Check)

- ① HP、学生便覧で文章表現が異なっている。
- ② 理念と教育目標を学内に周知する方法があまり設けられていない。

### 点検・評価を受けての改善事項 (Action)

- ① 広報室が中心となり、HPや大学案内、学生便覧等の広報媒体における「大学の理念」や「教育理念」に関する表現を整理・統一するように努める。今後もHPや必要と思われる広報媒体に記載して学内外関係者へ周知を図り、学内での周知の度合いを調査する。特に応用生命科学部においては、教職課程設置と1学科4コースの教育理念を周知する。
- ② 教職員、学生に、「大学の理念」と「教育目標」が周知されているとは言い難い。各学部の目標と合わせて周知する。

### 次期目標への課題 (Action)

- ① 理念・教育目標がさらに浸透するように取り組みを継続する。また、その周知の方法を見直す。
- ② 学生便覧に記載するだけでなく、学生にはオリエンテーションで改めて理念と教育目標を示すなど積極的に周知する。

## (2) 教育課程

### 第1次中期目標 (Plan)

① 薬学部6年制の学年進行の完成に向けて、必要な対応を講じる。

### 目標に対する成果・実績 (Do)

臨床実務教育の充実を目的として、5名の臨床系教員を拡充（内2名の助教はH22年度に公募しH23年1月より任用、3名の教授はH23年度に公募しH24年4月より任用）した。また、H22年度に新津医療センター病院と包括連携協定を締結した。さらに、カリキュラムの見直しをH22年度に実施し、授業科目の整理・統合、及び卒業研究Ⅰの実施方式について変更を行った。加えて、他の薬系大学に先駆け、在宅チーム医療を題材とした「専門職間連携教育セミナー」を開始した（H22年度）。学士課程教育の充実につながる中高大連携教育、大学間連携教育、社会連携教育の拡充と推進を目的とし、教育連携推進センターをH22年度に発足させた。

### 成果・実績に対する点検・評価 (Check)

薬剤師としての5年以上の実務経験がある教員が8名、助手が3名、医師としての実務経験がある教員が2名という体制となり、また、非常勤講師（臨床教授・臨床准教授を含む）として学内における臨床教育に助力いただいている現役薬剤師は50名を超える。臨床薬学教育を推し進める土壌は、他の薬系大学よりも充実している。新津医療センター病院との包括連携協定は病院実習の充実につながり、また、H24年度には附属薬局開局のための用地を取得し、薬局実習充実のための下地を構築している。他大学に先駆け「基礎と臨床の融合」を目指したアドバンスト科目を設定・開講しており、6年制薬学教育に必要なハード・ソフト面はすべて揃ったといえる。

### 点検・評価を受けての改善事項 (Action)

現在の状態で申し分ないが、さらに望むのであれば、専門職間連携教育プログラムや社会連携教育プログラムの独自開講、フィジカルアセスメントを含む、卓越した薬学能力を有する薬剤師の育成に向けた教育プログラムなどの立ち上げが行われればさらに良い。「基礎と臨床の融合」を目指したアドバンスト科目の拡充とともに、カリキュラムの改正時に検討する。

### 次期目標への課題 (Action)

臨床教育や社会連携教育の拠点として活用するため、附属薬局を開局する。

第1次中期目標 (Plan)
② 「カリキュラムポリシー」や「ディプロマポリシー」の作成・公表を含む学士課程教育のあり方について再検討し、「学士力の向上」を図る。具体的には、教育目標の到達度をより明確に設定し、体系的な教育課程を編成することにより、学生が専攻分野の学習を通して成果を実感できるように工夫する。
目標に対する成果・実績 (Do)
<p>薬学部では、薬学モデルコアカリキュラムに基づくカリキュラムを導入し、更に充実を図るべく、新カリキュラム検討ワーキンググループにおいてポリシーと合わせて検討を進めている。到達目標については、薬学部では「薬学教育モデルコアカリキュラム」をベースとした独自の学習到達目標を設定し、方略と評価法をシラバスに明記して周知している。また、ICTを活用したラーニング・ポートフォリオ形成システムを独自開発しており、学生が学習成果を実感できるような工夫が凝らしてある。</p> <p>応用生命科学部では、平成22年度に教務委員会で暫定的に作成したカリキュラムポリシーに基づき、平成24年度新入生からのスタートとする新カリキュラムを作成し、現在1年次生に実施中である。新カリキュラムにおいては、教養科目と専門科目との棲み分けを明確にして、1年次生の目標を明確にした。平成24年9月度の教授会において、カリキュラムポリシーを承認した。</p>
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
<p>薬学部ではH22年度に、アドミッションポリシーとともにカリキュラム及びディプロマポリシーを策定したが、学内外への周知度が低い。学習目標や学習方略、評価の三項目を明記したシラバスの作成やティーチング及びラーニング・ポートフォリオ形成システムを開発している点は、大きく評価できる。</p> <p>応用生命科学部においては、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー及びアドミッションポリシーを作成し、教育目標を立てた。</p>
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
<p>薬学部においては、カリキュラム及びディプロマポリシーを学内外に周知するように努める。学習行動領域別の評価が適正でない場合が散見されることから、FDの題材として取り上げ、周知する必要がある。また、「地域医療」に重点を置いた教育に関するカリキュラムを今以上に充実させることが、大学の特色を出すことにつながると考えられる。カリキュラム改正時に考慮することが望ましい。</p> <p>応用生命科学部においては、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー及びディプロマポリシーを確定させ、HPに掲載した。また、学部の教育目標を整備して、具体的に教育課題の設定に取り掛かっている。</p>
次期目標への課題 (Action)
<p>本学の理念に基づくディプロマポリシーに適切に対応して、単位認定及び卒業認定の基準を明確にする。</p>

<b>第1次中期目標 (Plan)</b>
③ 学部においては「入学前教育」及び「初年次教育」を重視した基盤教育の充実、大学院においては教育の実質化を中心とした教育の高度化推進を、それぞれ推進する。
<b>目標に対する成果・実績 (Do)</b>
<p>薬学部では、高大連携講座と銘打ち、受験前の学生に対し薬学を伝える教育を積極的に行っている。推薦入試合格者への入学前教育を実施するとともに、リメディアル教育や早期体験学習といった初年次教育についてもきめ細かい指導を行っている。</p> <p>大学院薬学研究科では、4年制大学院において、医療薬学を強く指向した内容の新カリキュラムを策定している。</p> <p>応用生命科学部では、AO入試・推薦入試後の入学予定者に対して学習テキストを配布し、理解度チェックを行う等の入学前教育を実施している。入学後も「初年次教育」(必修)において、ノートの取り方等きめ細かい教育を行っている。</p>
<b>成果・実績に対する点検・評価 (Check)</b>
<p>薬学部は自由選択科目(数学、生物、物理、化学)という形でリメディアル教育を行っており、一定の効果を上げている様に見受けられる。推薦入試合格者を対象とした入学前教育は年を追うごとに内容を拡充させ、H23年度からは週末に対象者を大学に集めて授業を行うスクーリングも行っており、肌理細やかな対応は評価できる。</p> <p>応用生命科学部では、初年次に化学のキャッチアップが必要な学生を対象とした科目外教育を行っており、ある程度の効果が得られている。</p>
<b>点検・評価を受けての改善事項 (Action)</b>
<p>リメディアル教育の位置付けの明確化、実質化(なにを、どこまでやるのか)を検討する必要がある。また、教育効果の評価法についても、検討する必要がある。</p> <p>入学後の授業について行けないと判断された科目に対する対処法を考える。</p>
<b>次期目標への課題 (Action)</b>
<p>チューター制度等の導入や補習授業の開講などを含め、成績不良者をなるべく出さない様な仕組みの構築に尽力する。また、左記の学生に対する具体的な対応策を考える。</p> <p>授業について行けない学生のために授業を易くすると逆に優秀な学生には易しすぎて、やる気をなくしてしまう可能性がある。そのような学生のために、特別な授業科目の設置あるいは化学、生物学等はアドバンスコースとスタンダードコースの2つの授業の併設の可能性を探る。</p>

第1次中期目標 (Plan)
④ 高年次生が「SA (スチューデント・アシスタント)」(仮称) として下級生の学習支援に当たる制度の導入について検討する。
目標に対する成果・実績 (Do)
薬学部では、教える側と教わる側の両者の教育の充実を目的として、平成23年度からSA制度を導入した。5、6年次学生をSAとし、1～4年次学生の演習や実習で活用している。また、これまで続けてきたTA (ティーチング・アシスタント) 制度も大学院学生を対象として行っている。 応用生命科学部においては、SAを用いずTAを利用して学部生の教育向上を図っている。
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
下級生への教育を通して、修得度の不十分な部分の炙り出しと能動的学習を促すことになるSA制度は、どのような形で運用されていても、非常に有用である。実際に教育に携わる学生の評判、教育を受けている学生の評判のいずれもが良く、評価できる。
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
SAやTA制度は、往々にして、教員の教育負担の軽減だけに寄与する構図となりやすい。SAやTAを行っている学生に対するフォローアップなど、実際に上手く運用している例を取り上げ、教員間で情報を共有し、より充実した学生教育プログラムにする必要がある。 応用生命科学部では、大学院生によるTA制度を利用したシステムを活用している。特に、実験などで効果を上げている。さらに、基礎科目の成績向上に努める。
次期目標への課題 (Action)
現在、実習や演習だけに使われているSA・TA制度をさらに発展させ、ビッグ・ブラザー制度のようなチューター制度への転用を検討する。 応用生命科学部においては、大学院生をTAとするシステムの拡大を検討する。

第1次中期目標 (Plan)
⑤ 課外活動の時間も含め、より選択肢の幅を持つカリキュラムを検討する。
目標に対する成果・実績 (Do)
<p>薬学部においては、新カリキュラム検討ワーキンググループにて薬学教育に関する新たなカリキュラムの導入を検討している。</p> <p>応用生命科学部における新カリキュラムでは、社会貢献に関わる課外活動を単位化した「キャリア形成実践演習」を選択科目として取り入れ、平成24年度後期からの授業として開始した。また理科教職課程の設置により、単位と認定されない教職課程科目の授業も増加している。</p>
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
<p>国家試験受験資格との関連から最低限教えなければならないコア・カリキュラムが存在するが故に、薬学部のカリキュラムは過密となっており、選択の幅は小さい。重複科目の整理を実施し、豊かな人間性の涵養にもつながるような、課外活動を行えるようなカリキュラムに変更する必要がある。</p> <p>応用生命科学部の「キャリア形成実践演習」では、被災地など危険性のあるボランティアは対象とせず、通常の課外におけるボランティアを推奨している。</p>
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
<p>重複科目の整理等を含めたカリキュラムの見直しを検討する。病院を指向する学生、薬局を指向する学生、専門薬剤師を目指す学生のための選択科目の新設についても検討する。</p> <p>応用生命科学部の「キャリア形成実践演習」では、大学が行う授業であるため被災地など危険を伴う可能性のある地域でのボランティアは対象としないことになっており、全学的な判断基準を設定し、推奨する活動の例示と参加を促す。</p>
次期目標への課題 (Action)
<p>本学の教育理念、各種ポリシーの早急な見直しあるいは策定を行い、それに沿ったカリキュラムの編成を検討する。</p>

### (3) 国家試験対策

#### 第1次中期目標 (Plan)

① 「薬学共用試験」・「薬剤師国家試験」の合格率向上を本学の最重要課題と位置づけ、必要な対策を講じる。

#### 目標に対する成果・実績 (Do)

学生を「薬学共用試験」や「薬剤師国家試験」に合格させるためには、修学内容を科目横断的に総括するような演習を通じた学習が必要不可欠である。このような考えから、4年次後期に「薬学総括演習Ⅰ」を、6年次後期に「薬学総括演習Ⅱ」を総合演習科目として開講している。これらの科目横断的な演習を行うに当たり、「薬学総括演習Ⅰ実施委員会」及び「薬学総括演習Ⅱ実施委員会」を設け、演習内容の調整と単位認定基準の策定・周知を行っている。

#### 成果・実績に対する点検・評価 (Check)

「薬学総括演習Ⅰ」及び「薬学総括演習Ⅱ」の実施委員会は、演習内容の調整と単位認定基準の策定・周知を行っており、共用試験及び国家試験の合格率からも、両委員会の活動が十分であったと評価できる。

#### 点検・評価を受けての改善事項 (Action)

最終段階に近い「薬学総括演習Ⅰ」及び「薬学総括演習Ⅱ」において好成績が残ればよいわけではなく、ここに到達する前までの修得度を上げる試みが必要である。自己学習支援システムを拡充・強化すると同時に、普段から学生が利用するように仕向ける仕組みが必要である。

#### 次期目標への課題 (Action)

そもそも、国家試験対策を本学の最重要課題とすべきではない。第2次中期目標・計画では、この項目は削除すべきである。

#### (4) FD (ファカルティ・ディベロップメント)

##### 第1次中期目標 (Plan)

① FDによる「教育力の向上」を目指す。具体的には、「大学の理念」や「教育理念」に基づき、学部の教育目標が教育課程や教育方法に反映しているかを継続して確認し、併せて教育目標の到達度を測るための仕組みを検討する。

##### 目標に対する成果・実績 (Do)

学部別にFD委員会を組織し、次の取り組みを行った。

##### ○学外研修会への積極的な参加

他大学で開催される学術教育研究フォーラムにFD委員が参加し、授業改善や初年次教育等について事例調査を行った。

##### ○教育力等を高めるための学内セミナーの主催

学外講師を招いて「FD講演会」を実施し、大学の抱える問題点などについて積極的に意見交換を行った。今後も、情報交換を続けることとした。

また、自己点検・評価表に「授業の自己点検評価」の項目を追加し、当該年度の教育内容・成果の振り返りや次年度に向けた改善の機会を設けた。

##### 成果・実績に対する点検・評価 (Check)

薬学部では、全ての教員が「薬学教育者のためのワークショップ」に参加し、「学習行動領域」、「学習到達目標」、「学習方略」、「学習評価」などのカリキュラムを構成する各要素について学習している。この点は、大いに評価できる。しかし、参加から時間が経過し、その理解度や修得度の低下がみられていることも否めない。学士課程教育改革で唱えられているような「学習成果基盤型教育」など、高等教育を取り巻く最近のトレンドに即した講演会の実施などが望まれる。

各教員が設定した学習到達目標に対して、どれだけの学生が到達できたのか、学生自身が知る方法は、通常の試験の成績のほか、薬学部では、学年到達度試験、薬学総括試験、卒業試験の成績や自己学習支援システムの成績、臨床実務実習連携システムにおけるポートフォリオなど、多種類の評価結果が得られるようなシステムになっている。一方で、学生を学習到達目標に到達させるための教員の支援(授業やチューティング、アドバイザー活動等)が有効だったのかどうかを評価するシステムは未だ構築されていない。評価が難しい分野ではあるが、検討する必要がある、FD委員会が主導して行うことが望まれる。

現状は総合的なFD活動には着手したところであり、現在、個々の教員の自覚を促す活動を計画している。シラバスの改訂と充実を目的にシラバスの作成マニュアルを作成し、シラバスに対する意識向上を目指した。

##### 点検・評価を受けての改善事項 (Action)

薬学部においては、高等教育機関では初となる教育の中身に関する評価が導入されることが決定している。その準備として、学部運営を担う主要メンバーに関しては、「教育力の

向上」や「学生の教育目標への到達を上げるための取組」などに関する様々な情報を積極的に入手し、共有しているが、教育に携わるすべての教員がこれらの情報を積極的に集めているとはいえない。学内あるいは学外の先生による「FD 講演会」を積極的に開催し、FD による「教育力の向上」を目指す。

応用生命科学部においては、各教員にシラバスを作る意義や背景など内容を良く理解してもらい、シラバスの中身の充実と改訂を行う。また一方で、自己点検・評価の新たな仕組みとして、日本技術者教育認定機構（JABEE）による「認定受審査制度」を導入することを目指し、鋭意検討を進めている。

#### 次期目標への課題（Action）

成績評価のルール、学生指導の心構え等、各委員会で問題になっている様な事象について、講演・ワークショップ等を開催して学内の意思統一を図る。（FD 委員会単独ではなく、学内の諸問題を検討し、学内の意思統一を図る機会を設けることを目的とすべきである）。

従って、将来計画委員会等で学内の諸問題を検討し、実行部隊として FD 委員会が必要な方策を実施する、といった体制作りを検討する必要がある。

第1次中期目標 (Plan)
② ICT (情報通信技術) を教育・研究に積極的に活用し、サイバーキャンパスシステム等を応用した事前・事後学習の推進、携帯端末を活用した学生応答・理解度把握システムによる双方向型授業の展開など、教授法の改善を検討する。また、「授業評価アンケート」の結果についても ICT を活用して対応策とともに学生にフィードバックするなど、アンケート結果の全学的な活用を検討する。
目標に対する成果・実績 (Do)
薬学部に関しては、ティーチング・ポートフォリオである Cyber-NUPALS や知識の修得度を記録するラーニング・ポートフォリオである自己学習支援システム、薬剤師として必要な技能・態度の修得度を記録する臨床実務実習連携システムを開発し、運用している。これにより学生は積極的に事前・事後学習に励んでいる。また、一部の授業においてポータルシステムの汎用アンケート機能を利用した出欠管理、理解度調査を実施しており、双方向授業を行う際のツールとしての利用も可能となっている。同じくポータルサイト等を利用し授業評価アンケートを実施し、体系的に結果を把握、より効果的な授業へ反映するよう鋭意検討している。また、ポータルサイトを利用した各種アンケートは、携帯電話にも対応している。授業アンケート結果に対する教員の自己点検・評価も行っている。
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
<p>Cyber-NUPALS や自己学習支援システムの導入によって、薬学部では学生の能動的学習 (自習) 時間は確実に延長しており、大いに評価できる。これらが学生の成績向上にどれくらい影響しているか、という点を明確にするためには、様々な視点での客観的なデータが必要であり、評価が困難であることは否めない。ICT ツールの利用はほとんどが学生の自主性に依存しており、年度開始当初のオリエンテーション時に、利用促進を目的とした大学側からの積極的な働きかけをしているが、全学年には浸透していない。</p> <p>応用生命科学部では、評価アンケートを HP で開示しフィードバックしているが、活用はしておらず、学部の課題を明確にし、利用システムを積極的に取り入れるべきである。</p>
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
<p>薬学部で運用している ICT を活用した各種の教育システムに PDCA サイクルを導入し、学生の主体性を引き出すようなシステムへの改編が必要である。また、仮想患者プログラム等、学士課程教育のみならず薬剤師生涯教育などにも利用できるプログラムを積極的に開発し、革新的・効率的な教育を目指すことも視野に入れる必要がある。</p> <p>応用生命科学部では、ICT の具体的利用法を検討し、学部生の情報活用、学習支援の向上を目指す。</p>
次期目標への課題 (Action)
<p>各種システムの必要性・有効性の検証 (利用履歴等の現状分析を含む) を組織的に実施する。その上で、有効性が認められた場合には、教員に対する Cyber-NUPALS 等の利用を徹底させる必要がある。</p> <p>また、授業評価については、その意義・あり方について、大学内でのコンセンサスを</p>

る必要がある。複数の教員によるオムニバス形式の授業では、教員ごとの授業評価を行うようにする。授業評価の時期を考え、有効なフィードバックが行えるようにする。

第1次中期目標 (Plan)
③ 成績評価については、適正な評価を行うため、事務部教務課を柱とした組織的かつ継続的な事後チェック体制を整える。
目標に対する成果・実績 (Do)
教育カリキュラムに関する最近の考え方をワークショップ形式で学ぶ「認定実務実習指導薬剤師養成ワークショップ」に、教務課職員にもサポートスタッフとして参加を促しており、学習到達度評価に関する講演も聞いていただいている。しかし、「適正な評価」かどうかを判断することは出来ても、なかなか教員に対して助言し難いのも事実である。
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
評価が適正かどうかで判断したとしても、実際に評価を行っている教員が「適正な評価とは」という問いに対する明確な回答を持たない限り、なかなか前に進まない。検証に必要なデータを出すことは事務部の仕事であるが、どのようなデータが必要なのかを検証するのは教員側の仕事であり、学習到達度評価に関する講演会等を開催し、教員の理解を深めることが必要である。
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
教員に対して、「適正な学習到達度評価とは何か」考えるようなFDを開催するところから始める必要がある。教員側の必要なデータとそのまとめ方について提示し、データ解析を可能とする。
次期目標への課題 (Action)
第2次中期目標・計画では、この項目は削除すべきである。 事務部との協同における課題を明示して、体制構築に努める。

第1次中期目標 (Plan)
④ 既に実施している教員の自己点検・評価制度について、さらなる定着と充実を図る。
目標に対する成果・実績 (Do)
<p>大学認証評価の第二期目を迎えるにあたり、PDCA サイクルを意識した自己点検・評価活動を行うため、自己点検・評価票の見直しを行った。</p> <p>加えて薬学部では、自己点検・評価を基にした学内競争的資金の交付を実施している。</p> <p>応用生命科学部では、PDCA サイクルが明確になる「自己点検・評価表」に改訂し、教員個人及び各委員会に対する外部評価を行った。</p>
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
<p>自己点検・評価表の提出を拒否し続けている教員への対策は実施しておらず、また、現状では評価の利用について踏み込んだ議論はされていない。</p> <p>応用生命科学部では、委員会活動の点検に対して外部評価を受けた。</p>
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
<p>外部評価委員による教員個人の評価は止め、学部内での点検・評価を行うこととし、今後は学部内規程を整備し、評価を行うことを検討する。</p>
次期目標への課題 (Action)
<p>自己点検・評価の位置づけの再検証が必要である。そのためのシステムを検討する。</p> <p>外部評価及び学部内評価の項目を明確にし、これに基づく評価を行う。</p>

## (5) 教育基盤整備

### 第1次中期目標 (Plan)

① 6年制薬学教育における臨床実務実習の充実を図るべく、「拠点病院」をはじめとする提携病院や提携薬局を開拓し、実習先の安定確保、より実践的な教育の実施、臨床現場と大学との連携による研究の推進など、高度薬剤師教育研究センター等とも一部連携しながら、包括的な連携によって、地域医療を担う人材育成の場として、揺るぎない教育基盤の整備・構築を図る。

### 目標に対する成果・実績 (Do)

新津医療センター病院を「臨床実務教育拠点病院」として位置づけ、更に地域医療及び地域社会の発展に資することを目指して「包括連携協定」を締結した。これにより、薬学部学生の臨床実務実習のみならず、本学実務家教員の実践的能力の維持・向上や共同研究の推進等を通じて、教育研究基盤の整備を図ることができた。

また、拠点病院以外の施設との連携においても、実務実習終了後のヒアリングやアドバンスワークショップ等により、医療現場職員の意見集約、および議論の場を設け、施設—大学間のコンセンサスの形成を含めた実習内容の定着・改善に努めている。また、高度薬剤師教育研究センターによる医療現場職員の研修は、医療現場職員のスキルアップのみならず、大学と医療現場職員との親和性の向上に有益であり、両者間の連携強化の重要な基盤の一つとなっている。

一方で、運営検討会議「学則等検討 meeting」において、大学として効果的・効率的な意思決定を意識した「全学教育委員会」、「全学研究委員会」等の設置について、検討を開始した。

### 成果・実績に対する点検・評価 (Check)

拠点病院のほか、実務実習提携病院・提携薬局も設置している。一方で、実習内容に関する議論・意見交換は十分に行われておらず、大学としてどのような臨床教育を現場に求めているのか、明確にされていない。実習の施設の違いによる教育格差は薬局実習において顕著に表れてくる傾向があり、それ故、本学がモデルとする実務実習を行う施設としての附属薬局の開局に向けて、現在動いている点は評価できる。

拠点病院における実務家教員の定期的な研修について、実務家教員全てが研修に参加しているのか不明である。また、その効果も不明である。

### 点検・評価を受けての改善事項 (Action)

臨床実務教育において、本学が目指すものを明確にするのと同時に、附属薬局の開局に向けて前進する。

### 次期目標への課題 (Action)

各企画の実質化及び効果の評価が急務である。実施することを整理して、その効果の評価を明確にする方法を確立する。

## (6) 生涯学習・社会貢献・大学間連携

### 第1次中期目標 (Plan)

① 「高度薬剤師教育研究センター」における「薬剤師生涯教育講座」等について、薬剤師会をはじめとした関係機関と連携して、研修プログラムの充実を図る。

### 目標に対する成果・実績 (Do)

毎年、「新潟県病院薬剤師会」「新潟県薬剤師会」「薬樹会（同窓会）」との共催により、高度薬剤師教育研究センターが主催して、座学の「薬剤師生涯教育講座」を実施している。さらに、糖尿病専門薬剤師スキルアップ講習会やフィジカルアセスメント研修会等、参加・実践型の研修会も開催している。

### 成果・実績に対する点検・評価 (Check)

講演会のみならず、参加型の研修会も開催している点は大変良い。また、卒業生の年間受講料を1,000円、それ以外の大学出身者を10,000円と、全国的にみても非常に低額に設定し、薬剤師生涯教育の普及に努めている点も大いに評価できる。

### 点検・評価を受けての改善事項 (Action)

新潟県薬剤師会が主催する各種の教育プログラムのほとんどは日本薬剤師研修センターの認定を受けたプログラムとなっており、本学高度薬剤師教育研究センターへの認定の申請がほとんど行われていないのが現状である。この点は、新潟県薬剤師会に働きかける必要がある。また、本学高度薬剤師教育研究センターが認定するプログラムの中には、特定の組織関係者だけが参加するようなものもあり、何を認定し、何を認定しないのか、明確にする必要がある。

### 次期目標への課題 (Action)

(6) 生涯学習・社会貢献・大学間連携について、各々の計画の位置づけをはっきりさせ、目的をより明確にする。

第1次中期目標 (Plan)
② 「公開講座」を活発化するとともに、学外者による講義の聴講や研修への参加を促進する。
目標に対する成果・実績 (Do)
<p>教育連携推進センターの設置により、中高生から地域住民まで、幅広い層の方々に対して充実した公開講座プログラムを提供している。新潟県の生涯学習システムである「いきいき県民カレッジ」のような、系統立てて行われる社会人教育を無料で提供している。年間の参加延べ人数は、600名を超える。</p> <p>また、外部講師による学部での講義を公開講座として開放し、多数の参加を得た。</p>
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
<p>教育連携推進センターは、シームレスな入学前教育の開催を目的とした中高大連携教育、他大学との協働・連携による充実した学士課程教育の開催を目的とした大学間連携教育、社会という教育資源を活用したり、社会人に向けた教育の開催を目的とした社会連携教育を担う部門である。大学外部と連携して行う教育を担う部門であり、学内に対する広報活動が手薄になる分、その目的を理解していない教員がいることも否めない。</p> <p>従来から本学で行われている「公開講座」のような単発の講演会のようなプログラムは、それを担当する部門が行えばよい。教育連携推進センターは、単発のプログラムではなく、系統立った教育プログラムを提供する部門と位置づけられる。この部門の社会貢献度は、多大である。</p>
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
<p>社会貢献の一つの形として、さらに拡充すべきである。生命科学・食品分野の人達を対象とした卒後教育講座も立ち上げることが望ましい。</p>
次期目標への課題 (Action)
<p>(6) 生涯学習・社会貢献・大学間連携について、各々の計画の位置づけをはっきりさせ、目的をより明確にする。</p>

第1次中期目標 (Plan)
③ 薬剤師会など地域の関係機関との連携・共同を強化し、医療現場における問題点を集め、学生に対する教育内容に活用して充実を図る。
目標に対する成果・実績 (Do)
地元の医師や薬剤師の方々を本学の臨床講師として招聘し、医療現場における実経験や問題点等について、直接的に学生の教育に当たっていただいている。
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
医療に携わっている現役の医療関係者から実習や講義を受けることは重要である。医療現場における問題点の抽出は十分に行われておらず、今後さらなる連携を図る必要がある。
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
医師や薬剤師を臨床講師として招聘したことによる実績と成果をわかりやすく示す。
次期目標への課題 (Action)
(6) 生涯学習・社会貢献・大学間連携について、各々の計画の位置づけをはっきりさせ、目的をより明確にする。

第1次中期目標（Plan）
④ 大学間連携においては、合同イベントにおける業務分担のほか、共同教育プログラムの開発を進めることによって教育・研究水準を高度化させ、地域社会に貢献できる人材の育成に取り組む。
目標に対する成果・実績（Do）
<p>「高等教育コンソーシアムにいがた」「新潟県知的財産管理ネットワーク連絡会」「国際・知財コンソーシアム」等の枠組みの中で、それぞれ特色ある大学間連携を展開している。また、「食と健康に関する新潟国際シンポジウム」では新潟県立大学や新潟大学との連携による運営が行われた。</p> <p>また、薬学部では、新潟医療福祉大学とともに「専門職間連携教育」を実施し、チーム医療を直接的に体験できる場を提供している。</p>
成果・実績に対する点検・評価（Check）
大学間連携を複数展開しているのは評価できるが、活動実績が少ない。
点検・評価を受けての改善事項（Action）
大学間連携に関する実績と成果を、わかりやすく示す。
次期目標への課題（Action）
大学間連携について、各々の計画の位置づけをはっきりさせ、目的をより明確にする。

(7) 研究支援・産官学連携・国際交流

第1次中期目標 (Plan)

① 科学研究費補助金や文部科学省「大学教育改革・学生支援推進プログラム」をはじめとする競争的資金を獲得するため、事務部庶務課における研究支援業務と競争的資金獲得業務を相互に連動させるとともに、教員と職員が一丸となって補助金の獲得に努める。

目標に対する成果・実績 (Do)

事務部庶務課における研究支援業務を更に発展させるべく、研究支援係を新設し、外部資金の獲得支援から契約・管理までのワンストップサービス体制を整えた。

科学研究費補助金については20件、戦略的研究基盤形成支援事業(文科省)や公的機関からの研究プロジェクト及び民間企業からの受託事業などの競争的資金については約30件の資金を獲得することができた。

成果・実績に対する点検・評価 (Check)

平成23年度の科学研究費の採択率は21.2%であり、全国平均の採択率(29.1%)に比べ低く、採択率を向上させるための体制を強化する必要がある。

点検・評価を受けての改善事項 (Action)

競争的資金を獲得するために科学研究費助成事業(科研費)の公募説明会を早期に詳細に行う。また、他大学で採択率の良い大学の活動を調査するなどしてより効率的な調書作成を目指して事務部基盤整備課(庶務課から研究支援機能等の専門的業務を独立させた新組織)による研究計画調書のブラッシュアップを行う。

次期目標への課題 (Action)

研究計画調書の更なるブラッシュアップを目指して、コーディネーターやアドバイザーの導入を目指す。

第1次中期目標 (Plan)
② 社会貢献活動を充実させ、社会から評価される大学を目指す。具体的には「産官学連携推進センター」が中心となり、活動状況の公開や地域活性化支援による貢献、受託研究や産学連携イベントを通じた知的資源の還元を進め、さらには学生の社会貢献学習機能なども付加していく。
目標に対する成果・実績 (Do)
研究成果による社会貢献活動を図るため、産官学連携推進センターにおいて、学内の知的財産を積極的に学外へPRするための取組みを展開している。また、学外から寄せられた相談を学内の研究シーズとマッチングする機能を強化し、地域社会と大学との架け橋として日々活動している。今年度のマッチング件数は、約30件であった。
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
教員に知的財産権(特許)を取得するという意識が足りない。もっと啓蒙すべきである。また、発明委員会で大学の特許としないと判定された場合、取得の方法が無い。
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
「大学魅力アップ調査活動支援事業」が採択された。国際感覚を備えた活躍を期待することのできる人材育成、地域を知り、地域を愛し、地域に根差した「大学の理念」に基づく教育が受けられるように、その先行調査を行い、具体的活動案をまとめる。
次期目標への課題 (Action)
社会貢献活動を充実させるため、学外の研究活動と学内の研究シーズとのマッチング機能を更に強化し、地域活性化を支援する。更に、学生の社会貢献学習についての機能も強化する。 特許事務所に依頼せずに特許を出願するシステムを学内に設置する。また、社会のニーズを効率良くキャッチし、共同で活動できるシステムを検討する。

<b>第1次中期目標 (Plan)</b>
③ 海外協定大学との国際交流を活発化していくため、まずは教職員による交流を図るとともに、学生レベルでの交流拡大の方法を検討する。
<b>目標に対する成果・実績 (Do)</b>
<p>海外協定大学のうち、中国吉林省の長春中医薬大学へ本学教員と応用生命科学部の学生を派遣させることで、人材交流をスタートした。</p> <p>また、アメリカのマサチューセッツ薬科大学へ教職員を短期派遣した。更に、オレゴン州立大学ライナスポーリング研究所やニューヨーク州立大学フレドニア校との連携協議をスタートした。</p>
<b>成果・実績に対する点検・評価 (Check)</b>
国外の大学と共同で活動する基盤を整備し、具体的活動項目を設定する。
<b>点検・評価を受けての改善事項 (Action)</b>
それぞれの国外の大学との共同活動の特徴を明確化し、担当者を決めて具体的活動に入る。
<b>次期目標への課題 (Action)</b>
具体的協定内容を設定し、中国だけでなくアメリカや欧州などの大学及び研究機関との協定を目指して活動を行う。

第1次中期目標 (Plan)
④ 優秀な大学院学生の経済的基盤の保証・教育機会の付与のため、TA や RA の制度を充実させる。また、これらの資源確保のため、外部資金の獲得に一層の努力を行う。
目標に対する成果・実績 (Do)
主に大学院薬学研究科において、優秀な大学院生を対象とした「夢きぼう奨学金」制度を設け、社会で活躍できる優秀な人材の育成と大学院教育の充実を図っている。また、TA や RA の制度を充実させた。 応用生命科学研究科では、TA や RA の制度を活用して、大学院生の経済的基盤の確立に努めた。
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
優秀な学生確保のためには、お金だけでなく、学業・研究意欲を充足させる必要がある。 学生の経済的基盤の確立には大いに努力している。外部資金獲得には優秀な学生の活躍が重要であるが、今後の努力が一層必要である。
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
モチベーションの高い学部学生を大学院に進学させる努力が必要であり、学部学生の研究意欲を向上させるシステムを検討する。
次期目標への課題 (Action)
優秀な大学院生の経済的基盤の保証・教育機会の付与のため、大学院応用生命科学研究科においても、新たな奨学金制度を設置し、社会で活躍できる優秀な人材の育成と大学院教育の充実を図る。 また、更なる TA と RA 制度の充実を図る。

## (8) 地域住民との協調

### 第1次中期目標 (Plan)

① 地域住民と大学との協調を強化する。具体的には、大学の施設を地域に開放して「地域交流イベント」を実施することにより、学生の社会貢献に関する涵養に役立てる。また、地域住民に学園祭等の大学イベントに参加いただく一方で、住民活動に教職員および学生が積極的に参加し交流する。さらには、災害時における相互協力について、検討を進める。

### 目標に対する成果・実績 (Do)

新津三者協議会に、学長、両学部長及び事務部長が定期的に参加している。また、町内会の方々や教職員が本学で定期的に会合を開き、地域住民との意見交換を行っている。秋葉区地域のNPO法人が主催する地域貢献活動に、本学の学生及び教職員も定期的に参加している。本学のボランティアサークルの学生も、秋葉区地域のコンサート・お祭り等のイベントにスタッフとして参加している。また、学部での外部講師の講演会を公開して交流を図っている。

本学に隣接した附属薬用植物園では、住民の見学や園内でのイベントも随時行っている。

### 成果・実績に対する点検・評価 (Check)

様々な形で、地域交流を図っているのは評価できる。災害時の相互協力について、より明確な協力体制を検討する必要がある。

### 点検・評価を受けての改善事項 (Action)

地域交流の活動内容を積極的に開示し、各種イベントへの新規参加者の開拓に努める。そして、地域の人たちとの交流を図るために、具体的な定期的もしくは被定期的なイベントの企画が重要である。

### 次期目標への課題 (Action)

災害時における相互協力について、明確なプランを立てる。

第1次中期目標 (Plan)
② 地域住民に役立つ「セミナー」や「ワークショップ」等を開催する。
目標に対する成果・実績 (Do)
新潟市秋葉区と共催のもと、本学を会場として地域住民向けの「地域交流講座」を開講している。また、高齢者を対象とした「おくすり相談会」を開催する等、適宜地域住民の方々の生活に密着したテーマでセミナー等を開催している。また、附属薬局の開局を目指しており、地域住民の健康相談室として機能することが大きく期待できる。
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
地域住民講座やおくすり相談会を開講・開催していることは評価できる。しかし、これらの企画は一方的なものであり、より地域から望まれる活動を企画することが望まれる。
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
地域住民講座やおくすり相談会等の実績と成果をわかりやすく示す。さらに地域との協議を進めて具体的な案を企画する。
次期目標への課題 (Action)
地域と協同した定期的なセミナーを企画する。

## (9) ブランドアップ広報

### 第1次中期目標 (Plan)

① 積極的な「ブランドアップ広報」を展開し、受験生および保護者に対し、教育内容や研究成果などの特色を明確にした形での大学の取り組みについて、訴求効果の高いアピールを行う。

### 目標に対する成果・実績 (Do)

広報室が設置されたことにより、責任体制の明確化と意思決定のスピードアップが図られた。また、ブランドアップ広報を展開するための一つの手段として、大学ロゴを制作した。

### 成果・実績に対する点検・評価 (Check)

本学の目指すブランドイメージの明確化やブランドアップの活動個目の設定が必要である。

### 点検・評価を受けての改善事項 (Action)

ブランドアップのための広報戦略を明確にして、関係者だけに任せるのではなく全教職員が認知し活動する体制を組む。

### 次期目標への課題 (Action)

大学が目指すブランドイメージを確立し、対象と目的を明確にするとともに、「良い教育」「良い進路」「良い研究・研究成果」等について、引き続き効率良く広報する。

各機関との連携強化による成果を公表し、大学のブランド力を高めるようにする。また、大学発の食品開発やマスコットのデザインなど、宣伝効果の高い内容を具体化する。

第1次中期目標 (Plan)
② あらゆるステークホルダーとの連携強化を図ることで、大学のブランド力を高める。
目標に対する成果・実績 (Do)
「後援会役員会」や「交流の会」等のイベントを通じて保護者や卒業生、就職先機関との連携強化を図った他、「新津三者協議会」や「産学官連携協議会」「東島町内会」等での会議を通じて、地域住民や自治体との連携も強化した。
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
連携強化の具体的活動がマンネリ化しており、「ブランド力」に新鮮感がない
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
ステークホルダーとの連携強化はますます重要であり、特に、卒業生へのアピールと地域への貢献が必要である。さらに、新津商工会議所などとの具体的活動項目をまとめる。
次期目標への課題 (Action)
ステークホルダーが強い興味を持つ活動内容を企画し、発信する。

第1次中期目標 (Plan)
③ 教育・研究成果及び評価結果の公表に際し、特に先端的な研究や教育改革の成果の公表方法を検討する。
目標に対する成果・実績 (Do)
<p>教育・研究成果のうち、特に影響力が高いと判断されるものに関しては、広報室主導のもと、プレスリリースやHP、広報誌への掲載等を徹底して実施することにより、マスコミなどから強い関心を得てきている。具体的には、テレビや新聞報道が多数行われた。</p> <p>また、薬学部における特徴的な教育に関しては、日本薬学会などで口頭およびポスター発表したり、シンポジストとして招聘されたりと、他大学からも大きな評価を得ている。</p>
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
<p>プレスリリースにより、特に新潟での報道関係に興味を引いてきており、その効果が認められる。また、薬学部における特徴的な教育が他大学の興味を引いている点は、大きく評価できる。</p>
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
<p>テレビ、新聞での教育・研究成果の公表は多くの人目にとまるので、これまでのように広報室主導で成果をできるだけ多くの人に知ってもらえるように公表していく。</p>
次期目標への課題 (Action)
<p>リポジトリなどでの研究成果の公開も検討する。また、研究成果が報道に価値があるかどうか常に意識できる報奨システムなどを考察する。</p>

## (10) 学生募集・入学試験

### 第1次中期目標 (Plan)

① 中長期的視野に立脚した、学生募集・入学試験戦略を構築する。目標は「(帰属収入を直接左右する) 学則定員入学者の安定的確保」とし、具体的な戦略としては、高校低学年からの接触を強化するとともに、「単位認定授業」を含む高大連携講座をはじめとした入学者増加のために多様な方策を講じる。

### 目標に対する成果・実績 (Do)

教育連携推進センター主催の「医療・薬学」講座において薬学部の授業単位が取得できる制度を設けるとともに、遠隔地での受講も可能となるシステムを導入した。

応用生命科学部ではアドバイザーと同行しての高校訪問、出前授業、出前実験、SSH など、小刻みながらも高校と連携を取って教育支援や広報活動を行っている。

### 成果・実績に対する点検・評価 (Check)

高大連携「医療・薬学」講座の受講生は年々増加の傾向にあり、単位取得者も増えている。本講座受講生のうち本学に進学した者も多く、薬学部の広報活動としての役割は十分に果たしている。

### 点検・評価を受けての改善事項 (Action)

それぞれの学部の特性に対応した戦略を整える。

### 次期目標への課題 (Action)

それぞれの学部で戦略を立てる部署を明確にし、入試委員会の活動計画を立てる。また、それぞれの戦略、戦術の効果を分析し、教務課入試係と連携し、次の活動の計画を立てるためのデータがまとめられるようにする。

第1次中期目標 (Plan)
② 推薦入試のあり方について、検討する。複雑化した入試実務の問題点を洗い出し、効率化に取り組む。また、受験生から見た、入学試験制度の分かりやすさにも考慮する。
目標に対する成果・実績 (Do)
推薦入試において、一般公募制の併願入試制度を導入した。また、薬学部においては、「医療・薬学」講座の受講生を対象とした推薦入試を設けた。 応用生命科学部においては、AO入試の選抜方法を4期まで設定した。
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
AO入試と推薦入試の定義、および募集の目的を明確に区別するべきである。AO入試を4期まで設定して、入試制度がますます複雑化している。
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
平成25年度入試スケジュールを考える時期になるが、原点に戻ってむやみに試験回数を増やしたり、小手先の変更を行うのではなく、実施した入試結果を分析し、次回に活かす。
次期目標への課題 (Action)
アドミッションポリシーに照らし合わせて、定員確保とともに、それぞれの入試の意味を吟味し有効な試験方法を再検討する。

第1次中期目標 (Plan)
③ 広報組織の充実によって情報収集・情報発信のシステマティックかつ効率化を図るとともに、受験生一人ひとりを大切にしたい学生募集活動を展開する。
目標に対する成果・実績 (Do)
広報室を立ち上げ、「大学広報グループ」「入試広報グループ」「渉外広報グループ」に分けて広報活動を展開することにより、業務の責任体制が明確になり、従来と比較してよりきめ細かい広報活動が可能となった。また、ホームページのデザインが新しくなり、高校生に対する情報発信源として機能している。
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
重要な情報発信源の一つであるオープンキャンパスのやり方を、工夫すべきである。参加する高校生の数が少ないのではないかと。大学が持つ教育・研究に関する特色的なコンテンツが受験対象生に対して、十分に伝わっていない。入試渉外活動の進め方、中身を見直す時期に来ている。
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
オープンキャンパスをもっと魅力的にする方法について、在学生の積極的な参加を促し、他大学のオープンキャンパスなどの情報も取るなど新しいアイデアを企画する。また、入試渉外活動の進め方、中身を見直す。
次期目標への課題 (Action)
受験生に本学を広報する抜本的な方法を、再検討する。

第1次中期目標 (Plan)
④ 本学の基本情報や入試要項をインターネットにより英語で情報発信し、外国人大学院学生の獲得およびグローバル・ブランド化を図る。
目標に対する成果・実績 (Do)
紙媒体で「大学概要 (英語版)」「研究概要 (応用生命科学)」を作成した。
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
HP への掲載を早急に行う。薬学部に関しては、薬剤師育成教育という性格上、外国人大学院生の受け入れに関して議論の余地が残るところである。
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
広報室と国際交流委員会が連携し、早急に HP への UP を行う。
次期目標への課題 (Action)
HP への UP のみならず、他の広報手段を検討する。

## (11) 学生支援・サービス

### 第1次中期目標 (Plan)

① きめ細かい生活指導を組織的に行い、学生の人間形成を支援し、意欲の喚起や学習支援の充実を図る。具体的には、履修・進路相談・健康維持などへの支援体制を整えるため、学生部の体制を整備し、学生委員会・学生課・就職支援室などの組織的連携を強化する。

### 目標に対する成果・実績 (Do)

修学上、生活上の悩みに対して、総合的に支援できる体制作りに着手している。学生委員会、学生課、さらには教務課とも連携し、より学生目線に立った支援を行う。専門のカウンセラーを常駐させることについても検討している。また、ピアサポート体制を確立すべく検討を行っている。

更に、学生支援サービスの拡充を目的とした「学生支援総合センター」の設置について、運営検討会議「学則等検討 meeting」を中心に検討し、報告書を取り纏めた。

### 成果・実績に対する点検・評価 (Check)

学生委員会、学生課、教務課が連携し、早急に学生支援体制を確立・充実すべきである。

### 点検・評価を受けての改善事項 (Action)

統括的な学生支援体制を確立・充実することを目的に、「学生支援総合センター」を立ち上げる。

### 次期目標への課題 (Action)

総合的に支援できる体制作りを完了させる。そして、カウンセラーの常駐も実現させる。ピアサポート体制の確立については、学生からの意見を集めた上で、具体的な計画案を示す。

<b>第1次中期目標 (Plan)</b>
② 経済不況の影響により、授業料などの支払いに苦慮する者が増加することが予想されることから、学生の勉学支援を充実するため、補助金を活用した「学費減免制度」などの拡充を図る。
<b>目標に対する成果・実績 (Do)</b>
平成24年度より「学内奨学金」対象者の増員および増額を実施。さらには「学費減免制度」における「支払猶予」を制度化しており、東日本大震災においては見舞金を支給している。また、経済上の理由により就学機会を失うことのないような制度の構築に向けた体制作りを行っている。
<b>成果・実績に対する点検・評価 (Check)</b>
学費減免制度の充実を評価するが、他大学での制度などにも比較してアピールできる面を充実させる。
<b>点検・評価を受けての改善事項 (Action)</b>
「学費減免」のメリットを、より有効なものとする制度を実現する。
<b>次期目標への課題 (Action)</b>
学内奨学金の金額のさらなる増額や、成績以外の面を考慮した奨学金制度の設立も検討する。

第1次中期目標 (Plan)
③ 通学時および行事開催時における利便性・安全性の向上を図るため、外部委託の可能性を含めスクールバス (学バス) の導入および試験運行を実施する。
目標に対する成果・実績 (Do)
平成24年4月からスクールバスの運用を試行し、利便性を高めた。また9月からは一部ダイヤを見直し、本格導入に向けた検討を開始している。
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
スクールバスの運用について、利用者数の把握とスクールバス運用に対する利用者の意見をまとめる。
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
試運転時のデータをもとに、利用者の要望等を取り入れて、スクールバスの運行時間について改善する。また、当面は無料となっている運賃についても、今後検討する。
次期目標への課題 (Action)
コストパフォーマンスを考慮し、JR新津駅～大学間の運行ルートだけでなく、別の駅からの運行の検討も行う。

第1次中期目標 (Plan)
④ これまでの休学・退学の実態を分析し、休学者および退学者の抑制に向けた学生支援策について、総合的に検討する。
目標に対する成果・実績 (Do)
薬学部では、休学者・早期退学者の実態を分析した結果、入試の時点でその予備群となる可能性のある学生を炙り出すことができている。定員確保というミッションとの兼ね合いになるが、このような学生の入学を避けるような方策も必要である。
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
休学者・退学者は増加しつつあるので、緊急性の高い問題であり、早急な対処が必要である。
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
休学・退学者の実態の分析を、早急に完了させる。
次期目標への課題 (Action)
学生支援体制の充実を図り、休学・退学につながりやすい学生の炙り出しとともに、これらの学生に対して、効果的なサポート方法を考え、実行する。

第1次中期目標 (Plan)
⑤ 県外出身学生の出身地を考慮した、広域的な「保護者面談会」の実施を検討する。
目標に対する成果・実績 (Do)
薬学部では、卒業生の子息・子女が本学に入学するような年代になってきている。このことを反映し、県外において定期的に「薬学部卒業生交流フェスタ」を開催し、本学学生の保護者でもある卒業生との面談も行っている。
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
本学入学者の県外比率は減少しているため、その増加にも実施案が必要である。
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
県外出身者に対する保護者面談会の具体案と受験生増加の方策を検討する必要がある。このため、開催の是非も含め、広域的な「保護者面談会」の在り方について検討する。
次期目標への課題 (Action)
サテライト方式やメールでの意見交換等の方法など、保護者との交流方法について実施可能な方策を検討する。 開催の是非も含め、広域的な「保護者面談会」の在り方について検討する。

## (12) 就職・キャリア支援

### 第1次中期目標 (Plan)

- ① 就職支援を強化し、「就職に強い大学」を確立する。具体的には、就職にとって最も大切な学生の「やる気」を醸成するための、「キャリア形成プログラム」を強化する。
- ② 低学年次からのキャリア教育を推進し、学習および就業へのモチベーションの向上を図る。

### 目標に対する成果・実績 (Do)

薬学部においてはカリキュラムの中にキャリア形成のための授業が多彩に組み込まれて入り、適切に行われている。また、就職委員会が主導して全学年にわたる「キャリア形成プログラム」を策定し、実施している。求人情報・説明会情報の検索・閲覧を即時的に行うことができるよう、ICTを活用した「就職支援システム」を整備している。

応用生命科学部においては、新カリキュラムに「職業とキャリア形成Ⅰ、及びⅡ」「キャリア形成実践演習」を1年次～3年次に組み込み、1年次からキャリア形成を自覚する体制を整えた。また、カリキュラム外として、高学年では学内就職企業説明会等を実施し、より実践的な企業研究、就職活動の場を提供している。

### 成果・実績に対する点検・評価 (Check)

- ① 薬学部には就職担当の専門職員がいないが、将来的には必要になると思われる。応用生命科学部の新カリでキャリア形成科目を充実させてはいるが、それにより本気で就職活動に取り組まない10%程度の学生が減少するか、見守りたい
- ② 就職委員会と教務委員会の業務分担が、明確になっていない。

### 点検・評価を受けての改善事項 (Action)

- ① これまでに就職できなかった学生のリストから、その理由を分析する。
- ② この分野の授業に関して、教務委員会と就職委員会の棲み分けが不明確である。別途、両委員会からの代表者による小委員会を設けて、独自に進めることも考慮する。

### 次期目標への課題 (Action)

- ① 就職活動の内容や形態は時代とともに変化するため、これに対応した担当者の配置が必要である。具体的には、就職支援室において、(小企業を含めた)企業訪問活動を専門に行う就職担当専門職員を配置する(現在の高校訪問の先生方と同じ役割)。また、薬学部の就職担当専門職員の雇用を検討する。
- ② 応用生命科学部のキャリア教育の3つの授業について、有効なシステム構築を行う。

第1次中期目標 (Plan)
③ キャリア教育を、生涯を通じた持続的な就業力の育成を目指すものとして、教育課程の中に適切に位置づける。具体的には、就職は単に卒業時点の達成目標ではなく、豊かな人間形成と人生設計を行うためのものとして、教職員によるキャリア形成の支援策を検討する。
目標に対する成果・実績 (Do)
<p>就職支援室とも情報を共有し、就職することに対する意義をしっかりと理解させること、また社会経験を積むことができるように様々な機会の提供に努めている。</p> <p>応用生命科学部における「職業とキャリア形成Ⅰ、およびⅡ」「キャリア形成実践演習」はそれを目的とした授業科目である。薬学部では、就職委員会が主導して全学年にわたる「キャリア形成プログラム」を策定し、実施している。</p>
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
<p>応用生命科学部においては、就職活動に積極的でない10%程度の学生の指導法を検討する。</p>
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
<p>キャリア教育への積極的な参加を図り、学生の出席による内定率の向上を目指す。</p>
次期目標への課題 (Action)
<p>前頁、同欄の①、②と共通。</p>

第1次中期目標 (Plan)
④ 就職先の確保・開拓を視野に入れた、卒業生と本学との交流会を戦略的に計画・実施する。
目標に対する成果・実績 (Do)
まだ十分とは言い難いが、卒業生との意見交換会を実施することで、就職先の開拓につなげていく努力がなされている。薬学部においては毎年地方で卒業生交流フェスタを開催し、学生の地元での就職に助力いただくような働きかけをしている。
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
卒業生には、在学生への企業の説明の部分で力を発揮してもらい、企業がリピーターとなるように卒業生・在学生共に意識を高める努力をする。
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
全卒業生の現在の状況を把握するなど、大学としてのフォローアップを強化する。
次期目標への課題 (Action)
事務部が主体となって以上の対応を図る組織を作り、大学として卒業生名簿を作成し、同窓会の機能アップの支援に努める。

第1次中期目標 (Plan)
⑤ 同窓会及び本学の関係について、卒業生、在学生および大学の恒久の発展を支えうる双方のあり方を、将来的な視点から検討する。
目標に対する成果・実績 (Do)
薬学部では、同窓会執行部と会合を持ち、大学の発展を支える在り方を検討している。同窓会によるお薬相談会の開催・実施は、その一つの表れといえよう。応用生命科学部では、現在、同窓生の現況の把握を行っている。
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
現況の把握に困難な面もあるが、同窓生へのサポートなど具体案を作成する必要がある。
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
まずロードマップを作成させる。その後、同窓会組織の現状把握、年度別卒業生の組織化、研究室ごとの卒業生の把握等について現状を把握する。
次期目標への課題 (Action)
現況把握に基づき、同窓会と協同して各学部学生の組織と機能をアップする。

## (13) SD（スタッフ・ディベロップメント）

### 第1次中期目標（Plan）

① 職員のマンパワー向上を図るため、複数年にわたる計画的な職員研修計画を策定し実施する。また、職員による海外大学への視察も取り入れるなど、見聞を広める取り組みを行う。

### 目標に対する成果・実績（Do）

日本能率協会が主催するSD研修等へ、事務部職員を計画的に派遣している。また、人材育成の一環として、事務部職員を海外大学（主にアメリカ、中国）へ派遣するなど、視察や研修等を実施した。

更に、新潟県が公募する「新潟県大学魅力アップ調査活動支援事業」の採択を受け、海外を含む他大学の先進事例（地域貢献活動に関する）を調査し、SDの一環として成果報告会を実施した。

### 成果・実績に対する点検・評価（Check）

HP等にSD活動の実態報告がなされているが、教員側から見え難いようである。ただし、SDの成果として、職員の質が向上していることは間違いない。

ただし、団体形式で行く視察出張については、実効性を考慮し、内容によっては単独行動に切り替える。

### 点検・評価を受けての改善事項（Action）

複数年にわたる計画的なSDが行われていることが、教員側には伝わっていない。実績を、成果も含めて周知する。

### 次期目標への課題（Action）

SDにより職員が短期間でスキルアップするわけではないので、継続的に実施する。また、年齢（あるいは職階）を追うような、段階的な職員研修制度を確立する。

第1次中期目標 (Plan)
① 職員の意識改革を図るため、学内における実質的なSD活動を実施する。
目標に対する成果・実績 (Do)
学外講師を招聘して講演会を実施した他、職員間で一定の共通課題について意見交換・ディスカッションするための研修会を開催した。また、「本学の魅力アップについて事務職員自らが考え、補助金申請を行う」といった企画をSD活動に取り入れ、申請を行った。
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
SD関連の講演会、意見交換・ディスカッションを含む研修会についても、何がどのように行われているのかが、教員には伝わり難いようである。上記と同様に講演会や研修会の開催については、全学的に伝えた方が好ましい。
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
HPの法人に関する部分か、あるいはポータルサイト内に、SDに関する活動を掲載する場所を開設し、SD活動の実態を知らせる。また、SD活動に教員の助力を得るなど、教員の理解を得ることも肝要である。
次期目標への課題 (Action)
大学を良くして行こうという意識改革のためには、教員を含めた大学全体の合同研修会の開催も必要と思われる。

第1次中期目標 (Plan)
③ 基本的な事務処理については、「事務組織目標管理制度」とも関連させつつ、能力の向上を図るための取り組みを行う。
目標に対する成果・実績 (Do)
事務部各課において年度ごとの目標を定め、それぞれ達成度を評価する仕組み（＝事務組織目標管理制度）を導入し、競争的意識を持ちながら能力の向上に努める環境を整備した。
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
②に同じ。
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
目標の設定と達成度の評価システムに誰が評価して、その評価に対して次年度の目標設定が適切に行われているかなど問題点を摘出する。
次期目標への課題 (Action)
上記の問題点の解決策を、明確にする。

## (14) 組織体制

### 第1次中期目標 (Plan)

① 教職員の人員計画と人件費比率の適正化を図る。具体的には、大学全体の人件費比率は、全国平均値を上限目標として計画する。また、情報インフラの充実によって業務がスリム化することを念頭に、大学の重点分野に人的資源を充当することを検討する。

### 目標に対する成果・実績 (Do)

教職員の人員配置を大学設置基準と人件費比率を勘案しつつ行った結果、全国平均値を下回る人件費比率を実現した。一方、情報インフラの充実により教職員の業務負担が軽減されたと言える指標はないものの、個別の業務の効率化は各委員会や事務部担当課において推進しており、効果が出ていると思われる。

なお、大学の重点分野に人的資源を充当する項目については、薬学部では臨床薬学分野、応用生命科学部では理科教育分野に、それぞれ人材を投入した。

### 成果・実績に対する点検・評価 (Check)

教職員間で業務の負担量の差異について、検討する。

### 点検・評価を受けての改善事項 (Action)

人件費比率は全国平均値よりも低いようであるが、教職員間で負担に大きな偏りがいないか精査する。

### 次期目標への課題 (Action)

5年、10年先の大学を見つめて教職員の人員配置を計画するために、将来の大学像を具体的に描く。

支出の大部分が人件費となっている文系の大学と人件費以外の支出が大きな割合を占める理系の大学、さらに医療関係の大学では、帰属収入における人件費比率が大きく異なる。文系の大学が多い日本では、人件費比率の「全国平均値」が高くなるのは当然であり、評価の基準が本学の実態に即していない。

第1次中期目標 (Plan)
② 教員の教育負担や教育・研究活動などを評価し、予算配分の最適化を図る。
目標に対する成果・実績 (Do)
教育・研究活動の評価結果を予算に反映させるための仕組みについては未着手であるものの、学生の配属人数による傾斜配分制度を導入する等、教育負担を考慮した予算配分の最適化を図っている。
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
教職員の合意のもと、教育・研究・運営に関する事項を点数化・数値化し、これをもとに予算配分を決めている大学もあることから、このような制度の運用実態を調べ、本学に適したものに改変し、導入することも視野に入れるべきである。
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
自己点検を評価する委員会を設けるなど、具体的評価体制を構築する。
次期目標への課題 (Action)
予算配分のための教育・研究活動の評価する方法を、各学部で確立する。

第1次中期目標 (Plan)
③ 事務組織内の連携を強化するとともに、部署間における不均衡な業務量の平準化を図る。併せて、実態に即した適正な人事評価に向けて、法人本部事務局と連携してその運用に努める。
目標に対する成果・実績 (Do)
広報室や各センター業務、学外向けイベント等において、部署間で連携を取りながら業務を推進できる体制を構築した。また、専任職員を対象とした、業務状況調査を開始した。
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
業務状況調査等から、部署により業務量の違いがあることが判明した。
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
連携して行う業務では、効率的に稼働しているのか、問題点を検証し、事務分掌の見直しを行う。
次期目標への課題 (Action)
適正な人員配置等、事務職員の人事等については法人本部事務局に具申し、同事務局と大学事務部が連携して、事務組織の充実を図る。

## (15) ハラスメント防止

### 第1次中期目標 (Plan)

① 学生および教職員からの悩みや相談・申し出に対応するための、実質的に機能する体制を整備する。

### 目標に対する成果・実績 (Do)

勉学上の疑問点や問題点、生活面での悩みなどを気軽に相談できるよう、相談窓口の一つとしてアドバイザー制度を設けた。また、カウンセリング室にカウンセラーを配置し、学生のみならず教職員も利用できる環境を整えた。

### 成果・実績に対する点検・評価 (Check)

ハラスメント防止委員会は存在するが、ハラスメント相談の窓口としての機能を担う委員会ではない。学生支援体制の拡充が望まれる。

### 点検・評価を受けての改善事項 (Action)

教員間あるいは教員と学生間において、パワーハラスメントあるいはセクシャルハラスメントを防止するための委員会が設置されている。この委員会を積極的に利用して、ハラスメント防止に努める。また、ハラスメント防止のためのアイデアを教員から募るのも一つの策である。

今後、無記名のアンケート等によりいじめやハラスメントの有無について調査する。

### 次期目標への課題 (Action)

ハラスメント委員会を積極的に活用して、ハラスメント防止に努める。

## (16) 施設・設備

### 第1次中期目標 (Plan)

① 情報活用に向けたポータルサイトを構築し、本学の財産とも言える蓄積された情報の一括管理の推進、データ同士の連携および活用、さらにはイベント等の情報を共有することにより、大学の機能性を高めるとともに、併せて事務コストの削減を図る。

### 目標に対する成果・実績 (Do)

ポータルサイトを構築し、学生情報を管理する教務システムとも連携を図りより効率的な運用を推進している。また、教職員に留まらず、学生向けに様々な情報を公開し学生サービスの向上を図っている。(但し、システム毎にデータを保持しているためデータの一元化についてはまだ改善の余地がある。)

### 成果・実績に対する点検・評価 (Check)

学生への教育サービス並びに事務サービスの向上を目的にして、ポータルサイトを充実させることと効率的な運用が必要である。ポータルサイトの運用に関してイニシアチブをとるような組織が必要である。

### 点検・評価を受けての改善事項 (Action)

システム毎にデータを保持しているため、全てのデータの一元化については更に改善を図る。

### 次期目標への課題 (Action)

ポータルサイトを充実させて、効率的な運用をおこなう。  
更に、大学としてのIR機能の有り方について、検討する。

第1次中期目標 (Plan)
③ 情報インフラ(ソフトを含む)の安定運用および各サービス利用環境の質的向上を図る。具体的には、ネットワーク体系の再構築や無線 LAN 環境の構築・整備を行うほか、情報セキュリティを強化する。
目標に対する成果・実績 (Do)
限定的であった学外からのアクセスについて、様々な要望を考慮し、一部機密情報を扱うシステムを除いて学外からのアクセスを可能とした。また、学内で学生が活動すると思われる場所(自習室、カフェテリア、情報実習室など)ほぼすべてに無線 LAN 環境を整備した。
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
近年の PC・スマートフォン利用者の増加に伴い、学外へのアクセス時の回線速度の向上が望まれる。
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
情報インフラの高度化に従って、更なるネットワーク体系の再構築や無線 LAN 環境の構築・整備を行う。更に、通信速度の向上を行う。
次期目標への課題 (Action)
Scinet の速度向上について、早急に検討する。

第1次中期目標 (Plan)
③ 各種保守契約の見直しや省エネ機器の導入により、管理経費の抑制を図る。
目標に対する成果・実績 (Do)
節電目標を掲げるとともに、F棟屋上への「ソーラーパネル」や節電型冷蔵庫の設置した他、デマンド監視装置の導入により電力使用量を削減し契約電力を下げることにより、電気料金の負担を軽減した。
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
管理経費の抑制を図るため、節電機器の導入や節電目標を掲げ、更なる節電を達成する必要がある。
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
更なる管理経費の抑制を図るため、各種保守契約の再度の見直しを行う。 また、更なる節電機器の設置を推進する。
次期目標への課題 (Action)
エネルギー消費設備の更なる見直しを行う。

第1次中期目標 (Plan)
④ 既存の施設・設備については定期的な点検を行うとともに、整備計画に基づいた改修を行う。また、省エネ、エコおよび低コストに配慮した施設・設備への改修を行い、環境負荷の少ない「エコキャンパス化」を推進する。さらには、トイレ照明の人感センサーの設置や、学生から要望の高いトイレの温水洗浄便座の増設なども行う。
目標に対する成果・実績 (Do)
<p>施設・設備は定期的な点検とともに、修理が必要と思われる箇所については随時改修を実施している。また、学内すべてのトイレの照明に人感センサーを設置し節電に取り組んでいる。温水洗浄便座については、必要性を検討した。</p> <p>一方で、運営検討会議のもとに「美化・緑化 meeting」を組織し、エコで且つ見た目にも美しいキャンパスをつくるべく、精力的に必要な改修ポイントの洗い出しを行った。</p>
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
環境負荷の少ない「エコキャンパス化」を目指し、省エネ、エコおよび低コストに配慮した施設・設備への改修を行う必要がある。
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
更なる省エネ、エコおよび低コストに配慮した施設・設備への改修と緑化を意識した改修を合わせて行い、環境負荷の少ない「エコキャンパス化」を推進する。
次期目標への課題 (Action)
環境負荷の少ない「エコキャンパス化」を目指し、省エネ、エコおよび低コストに配慮した施設・設備への改修を行う。

## (17) 安全管理

### 第1次中期目標 (Plan)

① 施設・設備や緊急対応について、危機管理のための訓練・点検を定期的実施するとともに、避難・誘導マニュアルの作成・改訂を進める。

### 目標に対する成果・実績 (Do)

防災安全委員会主導のもと、年に1回のペースで防災訓練を実施した。また、避難経路・緊急避難先・緊急時の対応等を簡潔かつ一目で判る様に記載した「防災カード」を作成し、学生及び教職員に配布した。

### 成果・実績に対する点検・評価 (Check)

防災訓練については、“やっているというだけで効果は期待できない。”と感じさせないような訓練が必要である。

### 点検・評価を受けての改善事項 (Action)

更なる緊急対応について、再検討を行う。  
また、危機回避ための効率のよい「避難・誘導マニュアル」の作成に向けて、必要な再点検及び再構築を行う。

### 次期目標への課題 (Action)

学生及び教職員の各個人が防災意識を高めることが重要であり、このような効果が期待できる防災訓練を行う。

第1次中期目標 (Plan)
② 研究関連施設・設備における安全性の確保およびコンプライアンス (法令順守) の確立を念頭に、必要な対策を講じる。
目標に対する成果・実績 (Do)
防災安全委員会主導のもと、定期的に校舎内の見回り点検を実施した。
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
研究が優先されているため、設備の安全性管理や薬品溶剤の管理が不十分であるが、安全性の確保を念頭に置き、必要な安全対策を講じる必要がある。
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
研究関連施設・設備における安全性の確保するために必要な項目を大小含めて列挙する。その後重要性の順位を付ける。 教員と事務職員により年1回の「安全パトロール」を行い、守られていない箇所は厳重に注意する。
次期目標への課題 (Action)
上記で順位の高い方から解決するべく、方策を考える。

第1次中期目標 (Plan)
③ キャンパスへの「入構認証システム」の導入や防犯灯の地域への寄贈により、学生・教職員が安心してキャンパスライフを送れるように、セーフティレベルの向上を図る。
目標に対する成果・実績 (Do)
キャンパスへの「入構認証システム」を導入し、夜間・休日等時間外の大学関係者以外の入構を制限(夜と休日は解放)し、また、キャンパス出入口付近に防犯カメラを設置することで、セーフティレベルの向上を図った。また、学内で特別な危機管理が必要となる印刷室等においても、入室認証システムを設置した。
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
セーフティレベルの向上を図るため、「入構認証システム」の導入が行われた。更なるセーフティレベルの向上を図るためには、各研究室のオートロックシステムの導入が望まれるが、その導入については検討が必要である。
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
学生・教職員が安心してキャンパスライフを送るには何が必要なのかについて、再検討を行う。全般的に、更なるセーフティレベルの向上を図る。
次期目標への課題 (Action)
セーフティレベル向上のため、建物の外(学生用駐車場等)にも「防犯カメラ」を設置するなど万全を期す。

第1次中期目標 (Plan)
④ インフルエンザなどの感染症予防のため、必要な対策を講じる。
目標に対する成果・実績 (Do)
対策本部（本部長：学長）を設置し、所管部署と連携を取りながら感染症予防対策を徹底した。
成果・実績に対する点検・評価 (Check)
エタノール噴霧器を玄関に設置し、インフルエンザなどの感染防止に努めた。
点検・評価を受けての改善事項 (Action)
各種感染症予防のためには何が必要なのかについて再検討を行い、必要な対策を講じる。
次期目標への課題 (Action)
各種感染症予防のための必要な対策を講じる。

## (18) 事業展開

### 第1次中期目標 (Plan)

① 数値目標を盛り込んだ次期の「中期計画」およびグランドデザインを策定するとともに、その具現化を目指し、将来の事業展開に備えた用地の確保や新学部の設置について検討する。

### 目標に対する成果・実績 (Do)

大学の今後のグランドデザイン策定に関わる次期「中期目標」については、設定期間を五か年間(平成 25～29 年度)とし、大学認証評価と連動させて、「PDCA 推進室」の設置と合わせて、その推進体制を強化することとした。一方、中期目標への数値目標の採用については、運営検討会議「将来計画 meeting」においても議論したが、大学運営に馴染まない面もあることから、真に必要な項目のみを目安として取り入れることで、大学の本来的な長所を伸ばすことを意識していくことを予定している。なお、各学部の新学科構想については、学部将来計画委員会に事務局が加わる形で、鋭意検討中である。

また、新たな構想である「新津駅西口キャンパス」「薬草・薬樹交流園」「学生サービス・管理複合棟」「新学科棟」(全て仮称)及び新潟日報社新社屋内に開設する「メディアシップ」の利用方法について、より具体的な事業計画の策定を開始した。

### 成果・実績に対する点検・評価 (Check)

大学認証評価に合わせて設置された PDCA 推進室を加え、検討を行う部署等の体制が補強されたことは評価できる。

### 点検・評価を受けての改善事項 (Action)

PDCA 推進室は大学認証評価に向けて PDCA サイクルが回るように努め、第1次中間目標での問題点を洗い出すことによって、次期の中期目標・計画策定のための一助となるよう努力する。これを受けて、運営検討会議にて「第2次中期目標・計画」及びグランドデザインの策定について、議論を続ける。

### 次期目標への課題 (Action)

大学の理念に基づく、長期計画及びグランドデザインを策定する。

一方、大学基準協会による第二回大学認証評価 (H26 年度実施) に向けた計画スケジュールを策定し、組織的かつ計画的に実施する。